

北海道新聞

夕刊

2009年
11月12日 木

発行所：北海道新聞社
札幌市中央区大通西3丁目6
〒060-8711 電話：011-221-2111



朽ち果てた船が
海底に横たわる。
水深40メートル。近づく
と、砲弾が視野に
入ってくる。おび
ただしい量だ。船内も同じだ。
写真家の田中正文さん(50)は
胆振管内洞爺湖町が、小樽の
高島岬沖に戦後間もなく沈んだ
商船「真岡丸」を昨年7月に調
べた。数々の水中写真は戦後が
終わって
ないことを
物語る。

水中写真は語る

犠牲者の
数を冠した
「1708

真岡丸は敗戦から4カ月後の
1945年12月15日、日本軍の
弾薬を進駐軍の命令で海に投棄
する作業中、誤爆で沈没した。
乗員87人全員が死亡した。
北海道新聞は「『本船、弾薬
爆発せり』との無電を残して消
息を絶った」と報じている。
田中さんは危険を冒し、戦没
船に光を当てる。無念の死を遂
げて海の底に眠る人々の霊を慰
め、死の意味を社会に問う。
「日本の繁栄は彼らの犠牲の
上にある」との思いからだ。
太平洋戦争の激戦地パラオで
5年越しの撮影を敢行し、一昨
年、写真集にまとめた。
次の目標は樺太から小樽に引
き揚げ途中、留萌沖で旧ソ連軍
の潜水艦に攻撃され1708人
が亡くなった「3船殉難事件」
の潜水調査と慰霊、記録だ。
「1708
プラス実行委員会」をつくり、
来年夏の実現を目指す。
来月15日には午後6時半から
北海道新聞小樽支社の3階ホ
ールで講演する。入場は無料。
真岡丸の事故で、当時20歳だ
った兄の滝上一保さんを失った
諏訪野鶴さん(76)は伊達市に
住む。「忘れないでくれる人が
いるだけで、兄も喜んでいるこ
とでしよう」 (山本 肇)